

# タイプライター展示室 概観

五房 正史



合計 17台が顔見せ披露。個々の詳細説明は展示室内にて。(レミントン ポータブル 5T は欠席。他に重複在庫が 5台程ある。)

後列：左端から右へ、ビンテージのアンダーウッド ポータブル 2台、コロナ・フォールディング 2台。邦文タイプライター、印輪式電動タイプライター。

中列：左から右へ、戦前のレミントン ポータブル、「ヘルメス・ロケット」、戦後の「ヘルメス・ベビー」2台、アドラー「ティッパ・デラックス」、ブラザー「バリエント」。

前列：左から右へ、オリベッティの名品 4台 = 「レッテラ 22」、「レッテラ 32」、「レッテラ DL」、「バレンタイン」。最後が現行の MacBook。

# タイプライターの部屋

## 五房 1551

この部屋には、機械式を中心に、概ね時代順に合計 19 台のタイプライターを展示しています。うち 2 台は博物館に寄贈済み、1 台は処分、それ以外は、全て動態を保っています。

### ☆ ビンテージ・タイプライター

商品としての初号、「ショルズ・アンド・グリデン」は 1874 年の登場なので、それからちょうど 50 年後の製品を黎明期と呼ぶのは無理がある。骨董の世界では 100 年経過しないとアンティークの範疇には入れないので、その則を外さない為に、ビンテージとしておく。



- ・ アンダーウッド 5型（1924年）[博物館寄贈済]

重さ 12.5 Kg！卓上に据え付けるもの、と考えると良い。既に QWERTY の鍵盤配列は事実上の標準になっていた。



・ アンダーウッド ポータブル  
Ⅲ型（1919年）



・ アンダーウッド ポータブル  
Ⅳ型（1928年）

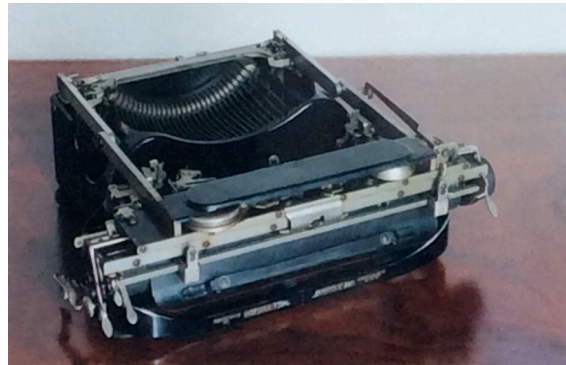
Ⅲ型は、3列鍵盤、28キー。大文字用と数字用のシフトキーを分けることで、84種のフォントを収める。Ⅳ型は鍵盤を1列増やすことで、ダブルシフトキーを廃した。機能は同じ、能率はⅣ型が上だが、Ⅲ型には見た目の愛らしさが残った。



・ コロナ フォールディング 3型（1920年）

コンパクトさを追求する狙いから、上半分が鍵盤の上に覆いかぶさる形で折りたためるようにしたのが、コロナ。右が畳まれた状態。コロナの原義は光の冠。百年後、ウィルスの名前に使われて迷惑するとは …。





- ・ コロナ フォールディング 3型（仏語、1923年）

同じコロナの、QWERTY が AZERTY に入れ替わっている仏語配列。ケースの厚さ 100mm はフォールディングならではだが、3Kg の重さは当然減らない。



- ・ レミントン ポータブル（1920年）

レミントンは全てのタイプバーを使わないときはワンタッチで収納できる機構を採用して、厚さを 3 インチ（76mm）に収めた。（左右同機種、左がタイプバーの起きた仕様状態、右がそれを格納した状態。）

「車輪の下」でノーベル文学賞を受賞したヘルマン・ヘッセも、「欲望という名の電車」のテネシー・ウィリアムズも、この「レミントン ポータブル」で執筆した。



- ・ レミントン ポータブル 5T型 (1935年)

設計に無理がなく、バーは折り畳めて当たり前のロングセラーとなる。



- ・ パイラード「ヘルメス・ロケット」(1935年)

従軍記者の道具ともなれば、極限の携帯性が求められる。大文字シフトをバーの側ではなく、プラテン側で行うため、打ち味が良いとは言えないが、鉄板製ケース込みで、厚さ 65mm、重さ 3.3Kg を達成。この時代のヘルメスはスイス、パイラード社製。



- ・「ヘルメス・ベビー」（1960年台）

民需が主となり、厳しさは消え、キャリングケースがビニール製となって、重さはやや増加。



- ・ ヘルメス「ヘルメス・ベビー」（1960年台）

会社名がヘルメスとなり、売り物のコンパクト性は失われていないが、外装にプラスチックが多用されてコストが下がり、大学生が主なユーザー層となった。 それでもビンテージには違いない。



## ☆ 現代のタイプライター

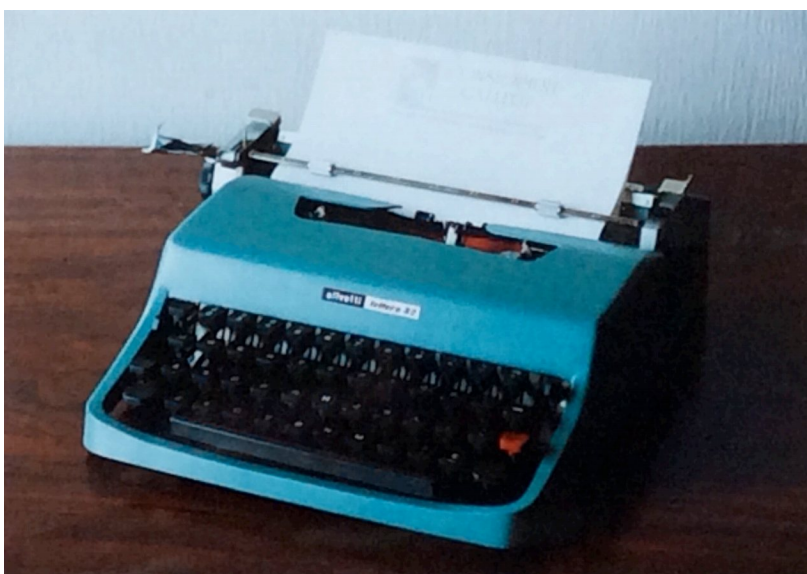
単独の製品としては姿を消した現在、現代という表現もおかしいが、機能的に完成した後、デザインの観点で名を成したものが多いので、そう括って置く。ワープロでは勝てないカーボン複写機能を活かして、インボイス作成事務に長く使われた高級品から、余り勉強したとも思えない学生向けまで、品質は雑多。晩年はその学生向けに身を落とした前述の「ヘルメス・ベビー」が、戦前戦後の時代変遷を端的に物語る。



・ オリベッティ「レッテラ 22」(1950年)

イタリア、ピエモンテ州のイブレアに本社を置くオリベッティ社の名作。全ての機能が備わっただけでなく、マルチェロ・ニッツオーリのデザインも全く手を加える余地がなく、MoMA（ニューヨーク近代美術博物館）の永久コレクションに選定されている。これはキートップが丸いその初期型、ピエモンテの骨董市で発掘して日本へ持ち帰った貴重品。

1960年封切りの映画、「太陽がいっぱい」では、アラン・ドロンの扮する貧しい青年、トム・リプレイが手紙を偽造するシーンに「レッテラ 22」がチラリと登場する。



・ オリベッティ「レッテラ 32」(1964年)

「レッテラ 22」から10年以上経過して、何も進歩していないことが、「22」の完成度の高さを物語る。「32」は一度生産中止になった後、21世紀に入ってからでもメキシコで昔のまま何も変えずに再生産が続き、累積生産台数は世界一。残存数が多いため、骨董品としての価値は低い、というのも皮肉な話。



・ オリベッティ「レッテラ DL」(1965年)



ブラック&シルバーのシャープなデザインは、エッソーレ・ソットサス Jr.。私が新入社員の時代、社内で英語の達人と見做されていた先輩がこれを使っていた。実際、使ってみると、打ち味の良さが抜群。部品設計のダイナミックバランスに十分な考慮が行き届かないと、このリズムカルな調子が出ない。



・ オリベッティ「バレンタイン」(1969年)

愛称の「赤バケツ」が示すように、使わないときに収納する縦置きケースとの統一デザインが秀逸で、デザイナーのエッソーレ・ソットサス・Jr. は、オフィスでない場所で使われることを想定した、と述べている。これも MoMA の永久所蔵品、デザイナーオフィスのオブジェとしての人気はピカイチ。建築事務所を開いた娘の友人に重複所蔵品をプレゼントしたら、オリベッティがニューヨークで開催した企画展の図録がお返しに戻り、海老で鯛を釣ったような気持ち。（余談ながら、今も新品が入手できるらしい。）



- ・ アドラー 「ティッパ・デラックス」(1960年台)

昔はドイツのトライアンフ・アドラー社が作っていた。堅牢ながら、製品精度をみれば、学生向けの典型。[数を減らすため、現物は処分。]



- ・ ブラザー 「バリエント」(1960年台後半)

私が大学生だった1970年頃、友人から譲り受けて初めて使った機種。英語が得意だった訳ではないが、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ハンガリー語に固有な特殊フォントを全てカバーしているため、音楽関係の帳票作成に重宝した。また、ブラインドタッチを身につけたことが結局、今に生きる。下段右端の赤いキーは連続動作のオートマチック・リピート・スペーサー。



・ 東芝 邦文タイプ BW-2112 (1970年台)

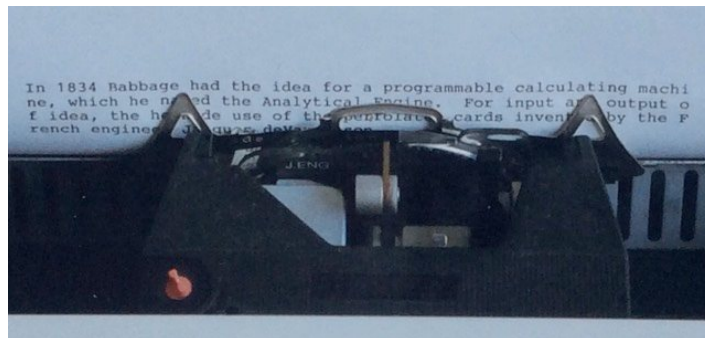
英文とは活字の数が根本的に異なる日本語のタイプライターは、印刷工の植字機から発展したものと考えて良い。平板状に並べた「パンライター」の方が僅かに長く使われたが、数多くの漢字を素早く見つけて、印字するという点では、平面か円筒かの違いしかない。回転するドラム上に 36列、39文字の文字を納めても、人名漢字など、外字の必要性は常にあるので、その例外処理に工夫があった。重さ 9.1Kg。写真に示すように、特許申請書などは、これで作成した時代が長い。



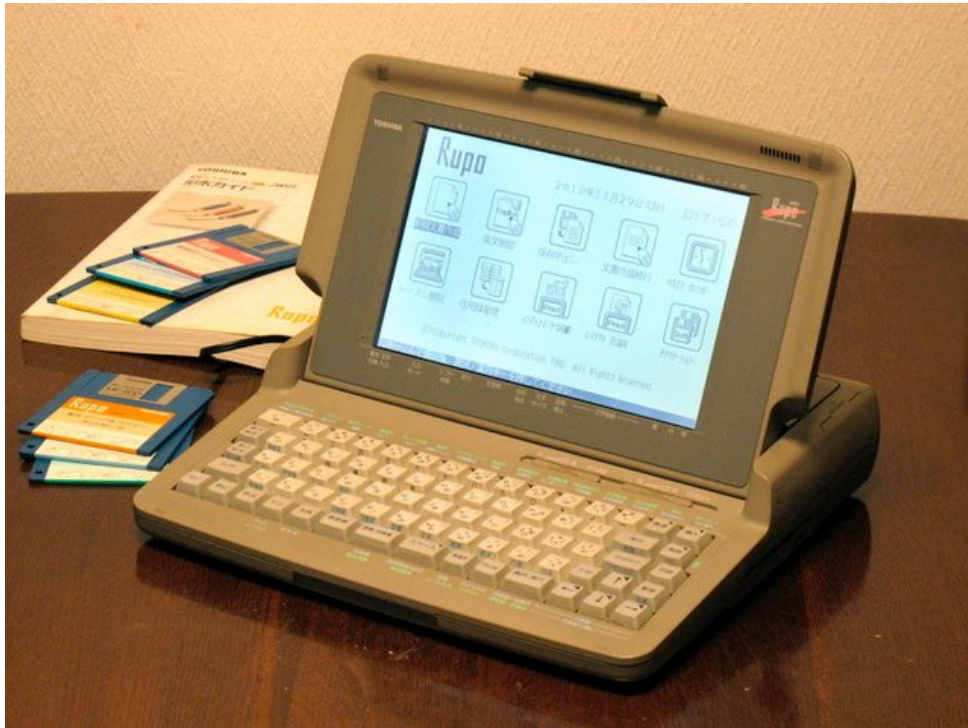


・ ブラザー 電子タイプ「Wordshot Ⅲ」

機械的なものが電子化されて行った過渡期の製品。活字棒は骨だけになった扇子のような円盤に置き換えられ、高速回転のタイミングに合わせて後ろから紙を叩く仕組み。



活字印輪部分の拡大。ゴルフボールの愛称で最も人気のあった IBM の電動タイプとは異なり、ミスタイプの修正機構は備えていない代わりに、太字の場合、周回遅れで 2 回目に同じ活字を微妙な時間差で打つことによって表現する、と言う絶妙な仕組みがあった。見ると感動する。



- ・ 東芝 パーソナルワープロ「ルポ」(1992年) [博物館寄贈済]

商品としてのパソコン初代、NEC「PC-8001」の登場が1979年。1985年にMS-DOS 3.1がOS上で日本語の漢字をサポートし始めると、1978年の初登場以来、急速に価格は下がっていたワープロ専用機も、単独商品としての魅力が薄れて来る。

それでも初代「JW-10」(630万円)の開発以来、プロ専用のワードプロセッサのノウハウを積み重ねて来た東芝は、操作や文章の編集方法に優れた点があり、「ルポ」のような専用機は生き延びた。しかし、往生際の悪かった先駆者たちは、結局その後のパソコンソフトの使い勝手の悪さに苦しむことになる。

実は私もJW-10が会社に導入されたときのオペレーターの一人。この原稿は古いWORDをMaC上で走らせながら書いている。人間の頭のOSは、歳を取ったらそう簡単に切り替えられるものではないことを痛感する。

(最終改訂 2021年 8月 10日)